江戸期における東大寺再建について

山本博子

一

東大寺は、江戸時代に大仏修復と大仏殿再興という一大事業を完成させている。即ち、貞享三年の大仏鋳造開始から元文元年の大仏殿背面土手の完成に至るまで五十年余が費され、その大勧進も、公慶をはじめとして公盛・公俊・庸訓の四代にも及んでいる。[1] この事業に関する勧進開始直後より、東大寺塔頭竜松院は、浄土宗、特に知恩院との親密な交流が見られる。そこで本稿は、東大寺と知恩院に残る文書によって、両寺の交流の一端を明らかにしてみたい。

二

両寺の江戸時代における交流は、『鎮西国衙方諸捌年中行事記』に初見される。即ち貞享四年春、竜松院公慶の勧進について、知恩院がとりなしたのに対し、東大寺惣代英秀が礼に赴いたという内容が見られる。[2] 更に元禄二年春、淀において行われた縁起講談も、同様に知恩院のはからいによって行われている（『知恩院史料集』一）。又、公慶が、元禄四年閏八月六日から九月二十四日まで行った京中勧進の折の宿坊は、知恩院塔頭九闇院であり、ここで一夜別時念仏を行っている。[3] そして元禄九年にも、この九闇院を京都町中の人別奉加金届け先にしている。[4] その他、京都以外の知恩院末寺においても縁起講談が行われている。例えば貞享五年六月には大阪天満九品寺にて（『東大寺年中行事記』）、元禄七年には日向国宮崎郡佐土原誓念寺において（『説黙日課』）、それぞれ公慶が縁起講談を行っている。江戸における勧進については、増上寺が助成している。元禄六年六月、江戸勧化所において行われた不断念仏の開闢導師は、増上寺住持貞誉了也であるし（『公慶上人年譜』）、その後も、特に大勧進公盛の時代以後に多く見られる。

このように竜松院は、畿内及び畿内以西においては知恩院、江戸においては増上寺の助力をそれぞれ得ているが、貞

享五年の大仏殿釿始、元禄五年の大仏開眼供養、宝永六年の大仏殿堂供養のいずれにも、知恩院の出仕は見られるが増上寺の出仕が見られないのは、単に距離的関係ではなく、知恩院に重きを置いている現われとみてよいであろう。[5]

三

上記以外の竜松院と知恩院との交流の主要なものを更に掲げると、貞享五年八月十九日には、東大寺惣代晋賢が知恩院へ赴いている。これは、同月五日の公慶の上人号勅許に関する礼であり、伝奏・関白・高辻大納言・勧修寺門跡・安井門跡及び知恩院に延紙を十五束宛進上しており、知恩院から何らかの配慮がなされたことが知られる（『東大寺年中行事記』）。

大勧進の知恩院への登山は、公慶に関しては、宝永二年に最も多くみられ、同年閏四月十五日の登山の折には、丈室より大仏殿上棟の祝儀が遣わされるなど好意的処遇がみられる（『知恩院史料集』三）。次に公盛が大勧進に就任すると、宝永二年十一月晦日に知恩院へ初めて登山し、方丈への対面を許されている（同上）。公盛は、その後も度々登山しており、知恩院側の史料に記される頻度は、公慶と同様に多くみられる。宝永五年二月二十四日の登山の折には、翌年四月の大仏殿堂供養に、大僧正及び門中などの出仕を願い（『知恩院史料集』四）、その結果、知恩院名代如来寺及び衆僧二百人の出仕が『大仏殿堂供養記』にて知られる。又、宝永八年正月の知恩院における円光大師五百年忌にも、公盛自ら出仕焼香し、銀子三枚を献上している。[6] そして、正徳四年正月二十四日には、竜松院使僧恵焼が知恩院へ年始の礼に登山しており、[7] これ以後、度々、使僧による年始の礼のための登山がみられる。年始の礼は、東大寺と知恩院との間においては、すでに元禄二年二月二日にみられるが、[8] 一塔頭である竜松院との間におけるものとしては、これが初見である。

公俊・庸訓の時代には、大勧進の知恩院登山はみられないが、代僧による年始の礼、竜松院と南都の知恩院門中寺院との交流は行われている。即ち、公俊の時代の享保十一年四月に行われた大仏勧進所念仏廻向の際に、南都の知恩院門中十三ヶ寺の僧が十念授与を行っている（『諸興隆略記』）。庸訓の時代では、東大寺において、元文二年四月六日から十二日まで行われた公慶上人三十三回忌の期間中に、前出の十三ヶ寺の出仕がみられる（同上）。

五代大勧進以降も両寺の交流はみられるが、主として、年始の礼、知恩院における遠忌などの折である。例えば、宝暦十一年正月に行われた法然の五百五十年遠忌には、竜松院代僧による銀一枚の献上と焼香拝礼が行われ、[9] 文化八年正月の六百年遠忌にも、ほぼ同様の記事がみられる。[10] 又、知恩院の出仕については不明であるが、安政六年三月には、東大寺指

図堂[11]において、浄土宗徒が集まり、法然の六百五十年遠忌が行われている（『東大寺年中行事記』）。

このように両寺の関係は、竜松院からの積極的な働きかけによるものであり、その内容は、大仏及び大仏殿再建に関するものが中心であることがわかる。特に、公慶・公盛は、頻繁に自ら知恩院へ赴いており、つとめて知恩院との交流をはかっている様子がうかがえる。公俊・庸訓の時代は、専ら代僧による知恩院登山がみられるが、これは、両寺の交流の円滑さを示すと共に、竜松院の機構の充実を意味している。

四

近世における竜松院と知恩院との交流から、中世の重源・法然両上人の関係が想起される。しかし、法然の推挙により[12]重源が大勧進に補任されたとする説にも賛否両論あり、文治の大原談義に至っては、行われたかどうかについて否定的見解も見られ[13]、両者の出会いについては不明確なことが多い。仮に、重源・法然両者に親密な関係がみられたとしても、中世から近世にかけての長期間にわたる東大寺と知恩院の関係が続いたとは考え難く、両寺の関係は、江戸時代に始ったとみなすべきであろう。

江戸時代初期の東大寺と浄土宗の関係を示すとも考えられる若干の史料がある。第一は、慶長二年八月、阿弥陀堂近くに浄土宗系の僧が一庵を建立していることである（『寺辺之記』）。そして慶長十六年には、阿弥陀堂内の重源将来と伝えられている五劫思惟阿弥陀坐像をめぐり、東大寺と、この庵の僧である有俊との間に争いが起き（『本光国師日記』）、元和四年に、有俊により像が盗み出される事件に発展している（『二月堂練行衆日記』）。第二は、寛永十年、五劫思惟阿弥陀坐像の修理に、浄土宗僧侶である領誉順故大徳・心蓮社深誉等が関っていることである[14]。これらの史料によれば、東大寺と浄土宗系僧侶との関係は認められるが、それは終止一貫したものでなかったことを示している。そして、東大寺内の一庵の僧は、浄土宗系の僧侶とはいえ、明らかに、知恩院及びその末寺の僧ではないことからも、江戸時代にみられる東大寺と知恩院との親密な交流は、公慶の大勧進就任の頃に始ったと考えるのが自然であろう。

五

上述の如く、両寺の交流は、主として、竜松院側よりの積極的な働きかけによることが明らかである。それでは、何故、竜松院側からの働きかけを必要としたのであろうか。

貞享元年十一月より始められた公慶の勧進が成果を上げなかったことは、元禄七年に人別奉加、更には元禄十年に人別十二銭の奉加許可を幕府から受けていることでも察せられ

る。各地の勧進巡行には、縁起講談が伴う事が多く、それには場所の提供者として寺院が必要となる。その寺院のいくつかに知恩院末寺が充てられたことは前述の通りであるが、これらの寺院確保の為にも、将軍家と浅からぬ因縁のある知恩院との交流を求めたのは当然ともいえよう。しかも、勧進の開始間もない頃は、後年のような、竜松院と各地の三昧聖達との支配関係が十分であったとは考えられないことから、[16] 知恩院の重要性は、少なくとも畿内及び畿内以西においては、確固たるものであったと察せられる。従って、江戸時代における竜松院の知恩院への接近は、公慶の勧進開始頃に始まり、その目的は、勧進に関する種々の助成であったと思われる。

1　東大寺大勧進在任期間は、公慶が貞享元年〜宝永二年七月、公盛が宝永二年九月〜享保九年五月、公俊が享保九年八月〜同十三年九月、庸訓が享保十三年十一月〜寛保元年七月である。

2　当初、知恩院との公的な交渉は、東大寺惣代が行っている。これは、竜松院が建立間もなく（建立は、貞享三年二月で、公慶は、従者一人を連れ竜松院へ移っている）機構も整っておらず、知恩院への礼を尽す為惣代が務めたと思われる。

3　大東急文庫蔵『京大絵図』裏面『大仏開眼供養付上人様京中御托鉢日記』。

4　『大仏殿再興発願以来諸興隆略記』（以下『諸興隆略記』と略称）。

5　遠方からの出仕は、宝永六年の大仏殿堂供養の折、武蔵国護国寺・護持院がみられる。

6　『元祖大師五百年御忌并御廟堂造営諸国末派御報謝記』。

7　『正徳四年日鑑』（五五号）。同年日鑑（五六号）には、正月二十三日と記されている。又、同年三月には、公盛自ら年始の礼に登山している。

8　『知恩院史料集』一。この時は、知恩院から東大寺坊中へ年始の祝に使者を遣している。

9　『五百五十年御忌勝手方日鑑』。

10　『六百回御遠忌都鄙門中諸向献備録』。

11　指図堂は、寛政三年に大風で倒れている。天保六年二月、奈良の浄土宗西方寺隠居僧の多門院慈運から、勧進所を通じ年預に再建願が出され、嘉永五年頃完成している。

12　否定論は、堀池春峰「重源上人の浄土教」（『南都仏教史の研究』上）がある。

13　同右、及び中沢見明『真宗源流史論』。

14　五劫思惟阿弥陀坐像台座天板上面墨書修理銘。

15　竜松院による三昧聖支配の状態は、弘化三年当時五畿内に限られ、近江・丹波への支配権拡大は、それ以降とみられることから（伊藤唯真「新出の『三昧聖由緒書』『大和国三昧明細帳』について」『鷹陵史学』六号）支配権は、次第に拡大されていったものと考える。従って、竜松院の建立直後の五畿内の支配状態は不明であるが、三昧聖が、公慶の勧進に随行した旨が『三昧由緒書』にて知られることから、畿内のある程度においては支配権の存在が認められる。ともかく、宝永六年の大仏殿堂供養・享保十一年の万日廻向に、千日墓所聖の出仕が見られるので、竜松院の五畿内の三昧聖に対する支配権の確立は、幕府の援助が行われなくなった公盛の時代以降であろうと考える。むしろ、幕府の援助なき勧進は、三昧聖の絶対的必要性を意味するからである。

（仏教大学歴史研究所助手）